

# いくつかのヴィジョン

豊田 英二

昨年六月十二日早暁、大平総理急逝の報に接し、私は驚きと同時に大きなものを失った思いを禁じ得なかった。生前、大平さんと直接お会いする機会はそれほど多くはなかったが、真摯で大きな大平さんのお人柄に、私は強い印象をうけ、政治理念にも多くの点で深い共感を持っていた。

とくに、私にとって感銘深いのは、総理大臣になられてからの国際舞台におけるご活躍ぶりである。総理就任の昭和五十三年の秋は、まさに一九八〇年代を目前にひかえて通貨変動の嵐が吹き荒れ、一方で第二次石油危機が勃発するなど、日本をとりまく国際環境はまことに厳しいものがあつた。大平さんは、この苦難をあの大きな体でがっしりと受けとめられ、日米友好親善を軸に幅広く海外諸国との相互理解に邁進された。国内における発言は、持ち前の慎重さからか時には歯切れのよくないこともあつたが、国際社会での大平総理は実に率直、明快だった。それは、世界における日本の地位の大きさに対する正しい自覚と責任に裏づけられたものであつた。一昨年の東京サミットでも、多元化する国際社会とエネルギー危機のなかで、これを立派にやりとげられた。

大平さんは、休むことを知らなかった。昨年一月には、半年後に訪れる自らの運命を知っておられたかのように、豪州、ニュージーランド、そして五月にはメキシコ、アメリカ、カナダと環太平洋諸国を精力的に歴訪され、日本の将来の繁栄に着実な布石を打ってこられた。総理就任以来一年半、超人的ともいえるご活躍であつた。

想えば、大平さんは戦後ようやくにして欧米にキャッチ・アップした経済大国・日本がこれから国際社会でい

かに生きていくべきかについて深い洞察をもち、身をもってそれを私どもに示されたといえよう。

こうした国際的な活躍に劣らず私の心に残るのが、日本の社会のこれからのあり方について提唱されたいくつかのヴィジョンと、その背後にある大平さんの信条である。

大平さんは、著書のなかで「政治家である前に一個の人間であらねばならない」と書いておられるが、その言葉にたがわず、実に人間味あふれる政治家であった。「田園都市構想」は、農山村と都市のそれぞれの良さを生かした、潤いある地域社会の実現をめざし、今日も「地方の時代」の中心的な理念として広く生き続けている。また「家庭基盤の充実」の主張によって高齢化社会を迎える日本の生き方にひとつの示唆を与えられた。

これらのことを通して私が感じるのは、大平さんは常に日本社会の活力について多大の関心を払い、広く文明的な見地から将来を考えておられたということである。個人あるいは民間の自助努力をひととき重視され、政府はできるだけ小さい方がよいという大平さんの政治姿勢は、こうしたところから生まれたように思われる。

私は、常日頃、今日の世界的な混乱から次の時代を拓いていく道は、個々人が情性におぼれず、活力を持ち、若さをとりもどすところにあると考えている。その点で大平さんの生き方には若さがあつた。「私の履歴書」を讀んで印象深いのは、永遠の学徒ともいえる思考の若さである。

志なかなばにして逝かれた大平さんの胸中は察するに余りあるものがある。かかる先達の足跡をふまえ、その理念を発展させていくことこそ私どもの責務であり、大平さんの霊をなくさめるものであると信じている。

ここに、ありし日の大平さんを偲ぶとともに、心から「冥福をお祈りして追悼のことばといたします。

(トヨタ自動車工業社長)